

ラテンアメリカ宗教研究動向 —「宗教の社会科学」の成立，展開，現在—

鈴木 亮

1. はじめに

本論文は、ラテンアメリカ地域⁽¹⁾における宗教研究の動向を紹介するものである。特に宗教を扱う社会科学である「宗教の社会科学 *Ciencias Sociales de Religión*」の分野がいかに成立し、展開し、現在に至るかに注目する。地理的な距離もあり、本邦においては比較的紹介されてこなかった地域であるが、その宗教現象、宗教史は注目に値する。はじめに現代ラテンアメリカの宗教現象を量的データから把握する。

現在、世界のカトリック人口の約 40%がラテンアメリカ地域に存在すると言われ、これは世界で最もカトリック教徒の多い地域である⁽²⁾。ラテンアメリカ内部においても、長い間カトリック人口は独占的な割合を占めてきた⁽³⁾。しかし、現在「ラテンアメリカはカトリック圏である」という言説は通用しない。1960 年代以降の「プロテスタンティズムの爆発的增加」⁽⁴⁾は、それまでのラテンアメリカにおける宗教地図の大幅な書き換えを要求した。カトリック人口の占める割合はラテンアメリカ全体では、1910 年、1950 年に 94%、1970 年に 92%だったものが、2014 年には 69%まで下がっている⁽⁵⁾。

ラテンアメリカにおいて拡大したプロテスタントの代表は、ペンテコステ派である。ペンテコステ派は、聖書を字義通り読み、禁欲的な生活をするなかで繁栄を志向し、神学的訓練を受けた牧師の解釈より聖霊の降臨など体験を重視する点がその特徴である。そして、教会組織としてのまとまりより、カリスマ的な牧師や活動的な信徒を中心に分裂し拡大していく運動的側面がある。1960 年代はラテンアメリカの多くの国で、軍事政権主導の極端な工業化、都市化が進み、大規模な人口流動が起き、経済格差が拡大した時代であった。改宗はまず、貧しい都市下層で起きた。故郷のカトリック教会を離れた人々が、ラジオを通じて行われる宣教に耳を傾けたのである。その後中産階級以上にも拡大しこれは新ペンテコステ派と呼ばれている。こうして拡大したプロテスタント人口は現在ラテンアメリカ全体の人口の 19%を占め⁽⁶⁾、その多くの割合をこの新旧ペンテコステ派が占めている⁽⁷⁾。

また 1960 年代は、カトリックにとっても変革の時代であり、カトリック内部の多様性が制度化し可視化した。第二バチカン公会議（1962-1965 年）はこの契機であり、カトリシズム自体の改革が本格化する。カトリック神学は、一元的な支配の仕組みだけでなく、社会的弱者の側に立つ抵抗の側面を強調し始めていた。こうした改革を支えた解放の神学の神父たちは草の根レベルでキリスト教基礎共同体と呼ばれる組織を形成し、社会問題に照らした聖書解釈を広めた。1970 年代に入ると、解放の神学に代わって、カトリックカリスマ刷新運動が活発化した。これは、ペンテコステ派のカトリック版であり、神学的な教義の理解より、聖霊との交流など体験を重視する点など多くの共通点を持つ。現在、カトリック人口の内 40%ほどがこの運動と関わっているという⁽⁸⁾。

また、無宗教、無所属も増加している。統計によれば、無宗教を自認する人々の割合はラ

テンアメリカ全体で 1996 年に 4%, 2007 年に 10%であったが, 2017 年には 18%にまで上昇している⁽⁹⁾。こうした人々の中には, 自らの信仰をスピリチュアリティやマイウェイ宗教だと自認する者も多い⁽¹⁰⁾。また, 教会から離れる人々も増加している⁽¹¹⁾。

このような宗教情勢の変容は, 大きな社会的関心事となっていた。しかし, この変化は社会的, 文化的コンテクストだけに注目する研究では説明し切ることができなかった。宗教的な多面性や複雑性は, 組織や家族の中, 個人の中に潜み, かつ顕れ, 人種や社会階層ごとに峻別できるものではなかった。宗教の総合的な理解のためには, 宗教の論理や宗教現象の内側の理解も必要とされた。したがって, この 20 世紀後半以降のラテンアメリカにおける宗教の大変動は, 宗教を中心的に扱う研究活動を大いに活性化させることになる。次章では, ラテンアメリカにおいて宗教を扱う社会科学の分野がいかに成立したかを概観する。

2. 「宗教の社会科学」の成立

本章では, ラテンアメリカにおける「宗教の社会科学」の成立の過程を概観する。20 世紀の後半にラテンアメリカにおいて芽生えた「宗教の社会科学」は, 現在一つの研究分野としての地位を確立し, 多くの研究者が国際的, 学際的に交流している。

ラテンアメリカにおいてこの始まりは比較的遅かった。この要因として, 一般にラテンアメリカの社会科学の多くは, 国家がパトロンとなって制度的, 経済的に保護, 奨励することで成立及び発展してきた側面があり, 応用科学的な経済学, 法学, 政治学と比して, 基礎研究の体系化が遅れたことがあげられる。さらにラテンアメリカにおいて, 植民地期以来カトリック教会の政治的権力, 宗教的権威は支配的であり, 長く宗教について学術研究することはタブー視されていた⁽¹²⁾。独立後もカトリシズムは多くの国で実質的な国教としての地位を守り, 政治的, 象徴的な力を持ち続けていた。

ラテンアメリカにおいて宗教を扱う社会科学が初めて登場したのは 1960 年代のことである。この契機となったのは, ラテンアメリカにおける解放の神学の開花である。解放の神学は, 自らの貧者の救済の論理にマルクス主義的社会学を応用した。この動きが注目され, 宗教を扱う社会科学が現れた。こうした社会科学に関わった研究者の多くが聖職者であり, この研究はカトリックの論理を強化したり, 肯定する目的のもとに行われた。これは現在「宗教的社会学 *Sociología Religiosa*」と呼ばれている⁽¹³⁾。

変化が起きたのは 1980 年代中頃である。当時, ラテンアメリカの国々では軍事独裁政権が倒れ, 民主化が始まろうとしていた。民主化に合わせて多くの知識人が亡命先から帰国した。そうした研究者を中心に, 宗教を社会科学によって客観的に把握しようとする新しい宗教研究, すなわち「宗教社会学 *Sociología de Religión*」が始まった⁽¹⁴⁾。これは宗教を研究対象として客体化し, 宗教的な規範から距離を取ろうとする研究群であった。この「宗教社会学」成立の出発点は, 1985 年の学術雑誌『社会と宗教 *Sociedad y Religión*』の創刊である。創刊に携わったアルゼンチンの宗教社会学者フォルトゥナト・マリマシは, 1978-1984 年のフランス亡命中に社会科学高等研究院で社会学を学んでいた。帰国後, 民主化に移行した政府から助成を受け, 当雑誌の創刊, 編集に尽力した⁽¹⁵⁾。

1990 年代になると社会学者, 人類学者, 歴史学者を中心に学際的な宗教研究の場が整備されていく。1991 年には第一回「ラテンアメリカの宗教的選択肢に関する学術会議 *las Jornadas sobre Alternativas Religiosas en Latinoamérica*」が開催される(当初は年毎に

開催、2002 年以降は隔年で開催された)。また、1994 年には「メルコスール宗教社会科学学会 Asociación de Cientistas Sociales de la Religión del Mercosur」が組織された。1999 年には当学会の機関誌『社会科学と宗教 *Ciencias Sociales y Religión/ Ciências Sociais e Religião*』(年 1 回発行)が発行された⁽¹⁶⁾。これらのプロジェクトには、主導したアルゼンチンに限らず、メキシコ、ブラジル、チリなどラテンアメリカ諸国から研究者が参加した。

以上のように、民主化移行後のアルゼンチンを中心にラテンアメリカにおいて「宗教の社会科学 *Ciencias Sociales de Religión*」が学問分野として整備されていった⁽¹⁷⁾。成立当初は地域色が濃く、各国各地域の量的調査が中心であり、研究テーマも社会課題に近い政教関係、世俗化、改宗研究などが主要な領域であった⁽¹⁸⁾。しかし近年、研究数が増加し多様化しながらも、新たな雑誌⁽¹⁹⁾やその特集号、学会⁽²⁰⁾、研究プロジェクト⁽²¹⁾の編成によって、学際的、国際的な学術ネットワークの構築が進んでいる。そうして現在は、質的調査が増加し、また多国籍多ルーツの研究者によってラテンアメリカ地域内外での比較研究が目指されている。次章ではラテンアメリカの宗教研究が、より大きな理論的関心といかに関わってきたか概観する。

3. 「宗教の社会科学」の展開

本章では、ラテンアメリカの「宗教の社会科学」の展開を、その研究手法の変化から捉える。この方法によって、20 世紀終わりから活発化し多岐化したこの分野にある程度の方向性を見出すことができる⁽²²⁾。ラテンアメリカの社会科学は欧米の理論を批判的に継承しつつ発展してきた側面を持つ⁽²³⁾。よって、ラテンアメリカにおける方法論のシフトは欧米のそれに呼応している部分がある。アルゼンチン出身の宗教社会学者グスタボ・モレージョらはラテンアメリカの「宗教の社会科学」の理論的潮流を世俗化理論、宗教経済理論、民衆宗教理論の 3 つに整理している⁽²⁴⁾。

まず、1990 年代以降ラテンアメリカにおいて大いに受容された理論が世俗化理論であった。これは端的に言えば「近代化が進めば宗教は衰退する(世俗化する)」というテーゼである⁽²⁵⁾。ラテンアメリカでは世俗化理論はフランス経由で流入し、広く流通した⁽²⁶⁾。近代化の進展に伴って様々な社会領域が分化や合理化し、宗教及び教会がかつて持った機能が世俗セクターに分けられていたり、宗教自体が近代化したり、宗教的権威や価値が低下したという理論である⁽²⁷⁾。

ラテンアメリカにおいても独立以降、政治、社会、経済のシステムは近代化した。民主化が進み、政教分離は制度上進展し、カトリック教会の権威は世俗的なセクターから抑制された。しかしながら、宗教的帰属に着目すれば、ラテンアメリカでは宗教的権威は衰えていないように見える。1910 年には人口の 95%が神を信じ、宗教団体に所属していると答えたが、これは 2014 年には、92%と 3 ポイントしか下がっていない⁽²⁸⁾。グスタボ・モレージョらは、これについて聖職者や教会の権威は低下しているが、政治、経済、市民社会、移民、人権、環境問題などの世俗的な「価値の領域」では、宗教がいまだに正当性の源泉となっているという⁽²⁹⁾。宗教的な価値と世俗的な制度は機能的に分化しても完全に分離はせず、同じ社会、個人の中で共存しているという。たしかにラテンアメリカにおいて、宗教と世俗の領域は明確な境界線を持っていないことが多い。例えば、週に一度カトリック教会で行われるミサに通い、信仰告白をして組織的な宗教に所属しながら、病いにかかれば呪医に相談に行

き、幼い頃曾祖父母に聞かされた俗信を信じる、これがなんの内心の葛藤なしに実現する。同じことがより公共的な領域でも起こる。経済政策に異議を唱えたり、それを支持したりするために、人々は宗教的な制度やシンボルに頼って、社会的な行動を正当化することが多くみられる。例えば、人工妊娠中絶の合法化および非犯罪化をめぐる議論などは大きな社会的テーマになっている。

世俗化理論への批判としてはまた、近代化のプロセス自体が普遍ではないとして、「複数のモダニティ」という発想からの批判も行われている⁽³⁰⁾。こうした批判から現在世俗化理論は修正、整理され、限定的に適用されているが、それゆえにラテンアメリカの宗教を説明するためにはほとんど根本的な理論的設定から立ち上げなければならない。

つづいて、アメリカ合衆国から流入した宗教経済理論は、宗教現象を世俗経済のモデルで把握しようと試みる理論であった。合理的選択理論に基づく宗教経済理論は、「自由」である（国家によって規制されていない）宗教市場には、「消費者」（信者）に「商品」（実践や教義）を提供する「供給者」（組織）が存在するとモデリングする。消費者は自分たちにとって合理的なものに投資するので、組織はその嗜好に適応し、競争する。したがって、自由で複数化された市場は、宗教活動を増加させる。こちらのテーゼは端的に表すと「多元化が進むほど宗教性は高まる」というものである⁽³¹⁾。

ラテンアメリカの宗教性を説明するために宗教経済理論が導入されたときもやはり、宗教組織の立場に焦点が当てられた⁽³²⁾。しかし宗教組織の構成や機能は、アメリカ合衆国とラテンアメリカの間では大きく異なる。ラテンアメリカでは、アメリカ合衆国の意味では公式の宗教組織は廃止されていない。ラテンアメリカの多くの国では、カトリック教会は「公式」、「歴史的」とされ、「事実上の国教」の地位を保っている。またこれは多くのヨーロッパ諸国のような法的、制度的に認められた「国教」ではない⁽³³⁾。宗教経済理論は、伝統的な国内教会によって独占された閉鎖的なヨーロッパの宗教市場に対する、多元的で柔軟性のある開かれた宗教市場というアメリカ合衆国のモデルに基づいていたが、ラテンアメリカには両者とはまた異なる歴史的経緯が存在する。その例としてまず、カトリックが常に内部の多様性を奨励してきたことがあるという⁽³⁴⁾。カトリック信者は単一の信仰告白のメンバーであるにもかかわらず、実際には非常に多様化している。異なる宗教的経験を「選択」するために完全にカトリックを離れる必要はなく、信者は、カトリックの世界の内部で望ましい経験を見つけることができる⁽³⁵⁾。この多様性は、多元性とは異なり、カトリック教会は社会的な規制を持ち続けているという指摘もある⁽³⁶⁾。さらに、宗教的選択の合理的な側面を強調することは、物質的、身体的、感情的な要素も含むラテンアメリカ人の宗教的实践を理解する上で有用ではないかもしれないという批判もある⁽³⁷⁾。

三つ目の潮流は民衆宗教理論である。これは、世俗化理論がヨーロッパ式、宗教経済理論がアメリカ合衆国式であったとするならば、ラテンアメリカ地域が目線からボトムアップ的に行われたという意味でラテンアメリカ式の理論であったといえよう。2000年代におけるフランス宗教社会学（特にダニエル・エルヴェ＝レジェ）の影響によって制度宗教ではなくその周縁の宗教性への注目が喚起されたという⁽³⁸⁾。この民衆宗教はカトリック伝統の民衆文化から、先住民のスピリチュアリティ、アフロ・カリビアン宗教、日系新宗教まで、幅広い信仰を含んでいる。そして民衆宗教理論は、民衆（信者）とエリート（制度）の間の緊張を強調し、信者と制度の間の「共同体的」な次元の存在を強調する⁽³⁹⁾。

ラテンアメリカにおいて民衆宗教の起源は植民地時代と結びついている。カトリックの

伝来以来、広大なラテンアメリカにおいてカトリック司祭の数は常に不足しており、村や町ごとに教会堂が建てられても、常駐する神父がいないことも珍しくなかった⁽⁴⁰⁾。そこで発達したのが、諸聖人にちなんだ信心講「コフラディア Cofradía」であった。行政区画や血縁集団ごとにカトリック聖人への崇拜が持ち込まれ、土着の信仰体系と習合し、独自の民衆カトリシズムが形成した。祝祭はカトリックカレンダーに基づいて行われ、大きな祭りでは「マジョルドモ Mayordomo」と呼ばれる祝祭の主催者が年ごとに講内持ち回りで担当される。植民地期において教会はこれを指導、監視し、行き過ぎた異端的信仰や実践については罰したが、監視の目は完全には行き届かなかった⁽⁴¹⁾。この制度的な弱さが、エリートの管理からは程遠いカトリックの自律的な形態を生み出した⁽⁴²⁾。民衆宗教性とは、公式なものでも個人主義的なものでもなく、人々が日常生活の中でスピリチュアルな存在について語り合い、共有することを可能にする共同体的な宗教性であるという⁽⁴³⁾。

しかし、このラテンアメリカ式のアプローチもまたいくつかの問題点を有している。まず、民衆の抵抗の側面を強調するあまり、反エリート主義的なイデオロギーが先行し、エリートと民衆を、信仰／実践、純粋／混交、記述／口述、理性／感性、精神／物質などの図式に振り分け、社会階層間の分断を際立たせてしまう側面がある。また、民衆宗教理論の適応は民衆カトリシズムに集中し、他の宗教伝統や無宗教を疎外する傾向にあること⁽⁴⁴⁾や、社会階層や地域を横断するような宗教性を捉えにくいこと、定義の曖昧さから「ポップ」な宗教性にまで研究領域が拡張し(南北間の)対話が難しくなっていることなどが指摘されている⁽⁴⁵⁾。

ここまで、アプローチの整理によってラテンアメリカの「宗教の社会科学」の展開を概観した。ラテンアメリカの宗教性に関しては公共、組織、個人のどのレイヤーにおいてもヨーロッパやアメリカ合衆国とはまた別の仕方ではアプローチの適用に困難がつきまとった。ただそれゆえに、有効な批判が生産され、理論的に洗練される場ともなった。それでは、現在いかなるアプローチが検討されているか、次章で紹介する。

4. 「宗教の社会科学」の現在

本章では、近年「宗教の社会科学」の分野において注目されているアプローチとその研究についてごく簡単に紹介する。ラテンアメリカ特有の文脈を踏まえた上で、これまでの理論的課題の乗り越えが試みられている。

グスタボ・モレージョらは、新たなアプローチとして「生きられる宗教 Lived Religion / Religión Vivida」を提案している⁽⁴⁶⁾。前章で紹介した3つの理論はそれぞれ異なる方法ではあるが、宗教団体や制度の持つ、権力や規制、競争力を取り上げていた。一方で、生きられる宗教のアプローチは信者の創造性を認め、それによる宗教の変容性に着目し、宗教の物質的、感情的、感覚的な側面を捉えようとしている。テキストと制度の強調から、生活の中の宗教への転回は「日常的転回 Quotidian Turn」と呼ばれ、新たな方法論として注目されている⁽⁴⁷⁾。こうした潮流の中でラテンアメリカの事例は盛んに研究されている。初期にはトマス・トゥイードが、マイアミのキューバ系移民の聖母信仰について参与観察を行った⁽⁴⁸⁾。ラテンアメリカの研究者によるまとまった研究にはウーゴ・ラビア、グスタボ・モレージョらによる『日常の経験としての宗教——南米における諸信仰、諸実践、精神世界に関するナラティブ』⁽⁴⁹⁾や、アナ＝ルルデス・スアレスによる『谷において信じること——ブエノスアイレスの都市下層における崇拜と宗教実践』⁽⁵⁰⁾がある。こうした研究は共通してテキスト

や聖職者とその組織を特権化せず、宗教現象の変容性に目を向け、宗教を動的なプロセスとして扱っている。

またこうした流れの中で特に、宗教の物質的な側面に注目する「物質宗教論 Material Religion」が盛んに研究されている。エルサルバドル出身の宗教学者マヌエル・バスケスは理論的研究書において人々の宗教的創造性に注目している。彼は、物質とは Object に限らず、感覚など様々なものを含むとし、身体、場、実践の概念を用いて分析している⁽⁵¹⁾。ラテンアメリカの事例研究としては、ジェニファー・シェッパー＝ヒューズによるメキシコの十字架に関する物質宗教史⁽⁵²⁾や、アンドリュウ・オルタによるボリビアの事例研究⁽⁵³⁾などがある⁽⁵⁴⁾。

さらにこれらの動きと呼応しながら、一方で制度宗教への再注目も起きている。例えば「キリスト教の人類学 Anthropology of Christianity」と呼ばれるグループは、キリスト教自体の理解が不十分であるとして、神学的な議論との対話を目指している⁽⁵⁵⁾。また神学的な研究としては、脱植民地主義的キリスト教論の議論が注目されている⁽⁵⁶⁾。

5. おわりに

ここまでラテンアメリカ宗教研究動向を整理し、概観した。この作業によって、ラテンアメリカ地域が、新しい宗教研究のひとつの震源となる潜在性が見えてくる。「宗教の社会科学」の成立以来ラテンアメリカの宗教研究者の間で課題として共有されてきたのは、欧米との学術的従属関係であった⁽⁵⁷⁾。北米とヨーロッパの研究者は事例の調査のためにラテンアメリカに接近し、ラテンアメリカの研究者は欧米の理論的研究を受容するという構図が長く続いてきた。しかし、状況は変わりつつある。ラテンアメリカの「宗教の社会科学」は、地域内外に開かれた学術研究の場を切り拓き、一つの学問分野となるに至った。ラテンアメリカ地域から宗教を考えることは、近代やキリスト教の多元的な在り方を考える上で、北米やヨーロッパに対するオルタナティブな視座となる可能性を持っている。

また、ラテンアメリカにおける宗教研究とカトリシズムの間にある微妙で複雑な関係性が示唆される。「宗教の社会科学」の成立は 20 世紀の終わりと比較的最近のことであった。これは長くカトリック教会の権威、権力が支配的であったことに起因する。しかし一方で、宗教研究を拓いたきっかけもまた、カトリシズムの多様性のうちから生まれたともいえる。多様なあり方で階層を越えて浸透したカトリシズムは独立運動のイデオロギーや、教育を下支えし、解放の神学や脱植民地神学を生み出した。早くから各国にカトリック系大学が設立され、現在の宗教研究の拠点もこの一部であるものが多い。ラテンアメリカにおける宗教研究とカトリシズムの関係は、抵抗／支配のような単純なものではなく、より複合的なものとして考えていくべきだろう。

現在、新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックによって、旧来の滞在型、訪問型の調査はかつてのように行うことはできない。人々の移動や接触は制限され、あらゆる出会いの機会が失われている。しかし、遠く離れた異郷の人々の暮らしや哲学への関心が尽きることはないだろう。この新しい分野は、日本において未だ十分に参照されていない。本論文が新たな関心や議論との出会いの契機となれば幸いである。

註

- (1) 本論文では、ラテンアメリカ地域にメキシコ以南のアメリカ大陸地域とスペイン語圏カリブ諸地域を含めることとする。そもそもヒト、モノ、情報は移動するため、国境は必ずしも文化圏を規定しない。北米を中心にトランスナショナルなラテンアメリカ地域が存在し、これについても断った上で扱うこととする。
- (2) Pew Research Center, *Religion in Latin America: Widespread Change in a Historically Catholic Region*, Washington DC, 2014, p. 4.
- (3) ラテンアメリカ内部では、1900年から1960年代までカトリック人口は少なくとも全体の90%の割合を占めていた。 *Ibid.*, p. 4.
- (4) Martin, David, *Tongues of fire: The explosion of Protestantism in Latin America*, Oxford, Basil Blackwell, 1990.
- (5) Pew Research Center, *op.cit.*, p. 4, p. 26.
- (6) *Ibid.*, p. 4, 26.
- (7) 大久保教宏「プロテスタントの爆発的拡大から半世紀——ラテンアメリカにおける宗教地図の変容」, 藤原聖子編『いま宗教に向きあう3 世俗化後のグローバル宗教事情世界編I』岩波書店, 2018年, 227-243頁。
- (8) Pew Research Center, *op.cit.* p. 15.
- (9) Latinobárometro, *El Papa Francisco y la religión en Chile y América Latina- Latinobárometro 1995-2017*, 2018.
<https://www.latinobarometro.org/latNewsShow.jsp> (2018年1月12日公開, 2021年1月19日最終アクセス)
- (10) Mallimaci, Fortunato (eds.), *Atlas de las creencias religiosas en la Argentina*, Buenos Aires, Biblos, 2013.
- (11) Rabbia, Hugo; Morello, Gustavo; Da Costa, Néstor; Romero Catalina (eds.), *La religión como experiencia cotidiana: creencias, prácticas y narrativas espirituales en Sudamérica*, Córdoba, EDUCC, 2019.
- (12) 大久保教宏「ラテンアメリカにおける宗教学の不在——メキシコの事例から」, 『東京大学宗教学年報』第30号, 2012年, 125-138頁。
- (13) Soneira, Abelardo Jorge, “Los Estudios de la Religión desde la Perspectiva de las Ciencias Sociales en la Argentina,” in *Boletín de Lecturas Sociales y Económicas*, no. 6, 1996, pp. 33-35.
- (14) *Ibid.* p.33
- (15) Mallimaci, Fortunato, “De 1985 a 2015: de la posdictadura a la ampliación de derechos y de la hegemonía católica a la pluralidad religiosa. Reflexiones a partir de la primera editorial de Sociedad y Religión,” *Sociedad y Religión*, vol. 25, no. 44, 2015, pp. 15-29.
- (16) Martín, Eloísa, “Presentación: Ciencias Sociales y Religión: un balance de 10 años,” *Ciencias Sociales y Religión/Ciências Sociais e Religião*, vol. 12, no. 13, 2010, pp. 9-14.
- (17) 1995年には国際宗教学宗教史学会議 IAHR の世界大会が、メキシコ市にて開催され

ている。

- (18) De la Torre, Renée; Martín, Eloísa, “Religious Studies in Latin America,” *Annual Review of Sociology*, 2016, vol. 42, pp. 473-492.
- (19) 本文中に挙げたものも含め、主要な専門誌には以下のようなものがある（刊行年）。「宗教と社会 *Religião & Sociedade* (1977)」、 「社会と宗教 *Sociedad y Religión* (1985)」、 最重要宗教研究の議論 *Debates do NER* (1997)」、 「社会科学と宗教 *Ciencias Sociales y Religión/Ciências Sociais e Religião* (1999)」、 「雑誌宗教研究 *Revista de Estudos da Religião* (2001) 」, 「文化と宗教 *Cultura y Religión* (2007)」、 「ラテンアメリカ宗教国際ジャーナル *International Journal of Latin American Religions* (2017) 」。
- (20) 本文中に挙げたものも含め、主要な学会には以下のようなものがある（設立年）。「ラテンアメリカユダヤ研究協会 Latin American Jewish Studies Association (1982)」、 「ラテンアメリカ宗教研究学会 Asociación Latinoamericana para el Estudio de las Religiones (1990)」、 「メルコスール宗教社会科学学会 Asociación de Cientistas Sociales de la Religión del Mercosur (1994)」、 「メキシコ宗教現象研究者ネット Red de investigadores del fenómeno religioso en México (1998)」、 「ブラジル宗教史学会 Associação Brasileira de História das Religiões (1999)」、 「アルゼンチン宗教的多元性に関する学際研究グループ Grupo interdisciplinaria de Estudios sobre el Pluralismo Religioso en Argentina (2010)」、 「ディベルサ アルゼンチン宗教的多様性に関する研究ネット Diversa, Red de Estudios de la Diversidad Religiosa en Argentina (不明)」 などがある。
- (21) 「ラテンアメリカ社会科学評議会宗教研究部会 Consejos Latinoamericano de Ciencias Sociales」も精力的に活動を行なっている。こちらは、ラテンアメリカ内の政治、経済、社会問題と宗教の関わりを調査し、域内で比較研究する目的で、2005 年から継続的に研究グループを組織し、研究活動を行っている。また、一般層へのアウトリーチも目的の一つであり、成果物はオンラインで公開されている。社会問題に近い分野が研究のテーマとなっている点でラテンアメリカの伝統的な活動的研究であるが、神学からの分離と、宗教に関する客観的な科学を標榜している。詳しくは以下の著作物を参照されたい。Aurelio, Alonso (eds.), *América Latina y el Caribe: territorios religiosos y desafíos para el diálogo*, Buenos Aires, CLACSO, 2008; Ameigeiras A. (eds.), *Cruces, intersecciones, conflictos: Relaciones político-religiosas en Latinoamérica*, Buenos Aires, CLACSO, 2012; Ameigeiras A. (eds.), *Los símbolos religiosos y los procesos de construcción política de identidades en Latinoamérica*, Buenos Aires, CLACSO, 2014; Giménez Béliveau, Verónica (eds.), *La Religión Ante Los Problemas Sociales: Espiritualidad, Poder y Sociabilidad En América Latina*, Buenos Aires, CLACSO, 2019.
- (22) 一方で、個々の研究や事例のもつ独自性や特殊性に関しては疎外してしまう点は考慮しなければならない。さらに、本論文では「宗教の社会科学」が特に人類学、社会学を中心としていることから、宗教心理学や宗教哲学の分野について網羅していない。以上の点については、概説書、サーベイ論文、事典が発表されており、それらを参照されたい。ここでその一部を挙げておく。De la Torre, Renée; Martín, Eloísa, “Religious Studies in Latin America,” *Annual Review of Sociology*, vol. 42, 2016, pp.

- 473-492; Morello, Gustavo, “Why Study Religion from a Latin American Sociological Perspective? An Introduction to Religions Issue, “Religion in Latin America, and among Latinos Abroad””. *Religions*, 10(6), 399, 2019; Levine, D., “Reflections on the Evolution of the State of the Art,” *Religions*, 10, 99, 2019; Thornton BJ. “Changing Landscapes of Faith: Latin American Religions in the Twenty-First Century,” *Latin American Research Review*, vol. 53(4), 2018, pp. 857-862; Esquivel, Juan Cruz; Giménez Béliveau, Verónica (eds.) , *Religiones en cuestión: campos, fronteras y perspectivas*, Buenos Aires, CICCUS, 2018; Funes, María Eugenia, “El espacio en los estudios sociales de la religión: perspectivas, objetos y problemas emergentes en las agendas de investigación latinoamericanas,” *REVER-Revista de Estudos da Religião*, vol. 19. 2, 2019, pp. 213-227; Suárez, Hugo José; Bárcenas Barajas, Karina; Delgado Molina, Cecilia (eds.), *Estudiar el fenómeno religioso hoy: caminos metodológicos*, Ciudad de México, UNAM, 2019; Garrard-Burnett, V.; Freston P.; Dove, S (eds.), *The Cambridge History of Religions in Latin America*, New York, Cambridge University Press, 2016; Gooren, H. (eds.), *Encyclopedia of Latin American religions*, Springer International Publishing, 2019; Blancarte, Roberto. (eds.), *Diccionario de religiones en América Latina*. Ciudad de México, Fondo de Cultura Económica, 2019.
- (23) Algranti, Joaquín; Mosqueira, Mariela, “Preguntas para una disciplina que se piensa a sí misma,” *Sociedad y Religión*, vol. 25, no. 44. 2015, pp. 182-187.
- (24) Morello, Gustavo; Romero, Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, “An enchanted modernity: Making sense of Latin America’s religious landscape,” *Critical Research on Religion*, vol. 5(3), 2017, pp. 308-326.
- (25) *Ibid.*
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*
- (28) Pew Research Center, *op.cit.* p. 26.
- (29) Morello, Gustavo; Romero Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, *op.cit.*
- (30) Garrard-Burnett, V.; Freston P.; Dove, S. “Introduction to the Cambridge history of religions in Latin America,” In Garrard-Burnett, V.; Freston P.; Dove, S (eds.), *The Cambridge History of Religions in Latin America*, New York, Cambridge University Press, 2016, pp.1-21.
- (31) Morello, Gustavo; Romero Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, *op.cit.*
- (32) *Ibid.*
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*
- (35) *Ibid.*
- (36) Frigerio, Alejandro; Wynarczyk, Hilario, “Diversidad no es lo mismo que pluralismo: cambios en el campo religioso argentino (1985-2000) y lucha de los evangélicos por sus derechos religiosos,” *Sociedade e Estado*, vol. 23.2, 2008, pp. 227-260; Frigerio, Alejandro, “¿Por qué no podemos ver la diversidad religiosa?

- Cuestionando el paradigma católico-céntrico en el estudio de la religión en Latinoamérica,” *Cultura y representaciones sociales*, vol. 12.24, 2018, pp. 51-95.
- (37) Ameigeiras, Aldo, *Religiosidad popular: creencias religiosas populares en la sociedad argentina*, Buenos Aires, Biblioteca Nacional, 2008.
- (38) Wright, Pablo; De la Torre, Renée; Steil, Carlos Alberto; Mansilla, Miguel Ángel; Garma Navarro, Carlos; Giumbelli, Emerson; Ceriani Cernadas, César; Suárez, Hugo José; Burity, Joanildo; Ludueña, Gustavo, “Sociedad y Religión, 30 años: Interrogantes, historia y poder en la producción de conocimiento sobre el fenómeno religioso en América Latina,” *Sociedad y Religión*, vol. 25, no. 44. 2015, pp. 188-245.
- (39) Morello, Gustavo; Romero Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, *op.cit.*
- (40) 大久保教宏, 前掲書, 2018 年。
- (41) なお, こうした自治的な祭祀組織はカルゴ・システムと呼ばれ, 古くからラテンアメリカ人類学の中心的なテーマとして研究されている。Foster, George, M., “Cofradía and Compadrazgo in Spain and Spanish America,” *Southwestern Journal of Anthropology*, 9(1), 1953, pp. 1-28; Wolf, Eric, “Types of Latin American Peasantry: A Preliminary Discussion,” *American Anthropologist*, 57, 1955, pp. 452-471.
- (42) Morello, Gustavo; Romero Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, *op.cit.*
- (43) Romero, Catalina, “Religion and public spaces: Catholicism and civil society in Peru,” in Hagopian, F. (eds.), *Religious Pluralism, Democracy, and the Catholic Church in Latin America*, Notre Dame, University of Notre Dame, 2009, pp.365-401.
- (44) De la Torre, Renée; Martín, Eloísa, *op.cit.*
- (45) Morello, Gustavo; Romero Catalina; Rabbia, Hugo; Da Costa, Néstor, *op.cit.*
- (46) *Ibid.* なお, グスタボ・モレージョが所属するボストンカレッジを拠点に, アルゼンチン, ペルー, ウルグアイ, スペイン, イタリアを比較する Lived Religion の共同研究プロジェクトが組まれている。https://www.bc.edu/bc-web/schools/mcas/sites/lived-religion/ (2021 年 1 月 31 日最終アクセス)
- (47) McGuire, Meredith B., *Lived Religion: Faith and Practice in Everyday Life*, Oxford, Oxford University Press, 2008; Orsi, Robert A., *The Madonna of 115th Street: Faith and Community in Italian Harlem, 1880-1950*, 3rd edition, Yale University Press, 2010; Ammerman, Nancy T. (eds.), *Everyday religion: Observing modern religious lives*, Oxford University Press, 2006. などの著作が広く読まれている。
- (48) Tweed, Thomas A., *Our lady of the exile: Diasporic religion at a Cuban Catholic shrine in Miami*, New York, Oxford University Press. 1997.
- (49) Rabbia, Hugo; Morello, Gustavo; Da Costa, Néstor; Romero Catalina (eds.), *La religión como experiencia cotidiana: creencias, prácticas y narrativas espirituales en Sudamérica*, Córdoba, EDUCC, 2019.
- (50) Suárez, Ana Lourdes (eds.), *Creer en las villas: devociones y prácticas religiosas en los barrios precarios de la ciudad de Buenos Aires*, Buenos Aires, Biblos, 2015.
- (51) Vásquez, Manuel A., *More than belief: A materialist theory of religion*. New York, Oxford University Press, 2011.

- (52) Scheper Hughes, Jennifer, *Biography of a Mexican Crucifix: Lived Religion and Local Faith from the Conquest to the Present*, New York, Oxford University Press, 2010.
- (53) Orta, Andrew, “Dusty signs and roots of faith: The limits of Christian meaning in Highland Bolivia,” in Engelke, Matthew; Matt Tomlinson (eds.), *The limits of meaning: case studies in the anthropology of Christianity*, New York, Berghahn Books, 2006.
- (54) 物質宗教論はまた、近年の人類学の潮流である存在論的転回の議論にも呼応している。クロード・レヴィ＝ストロースの影響下にあるフィリップ・デスコラやエドゥアルド・ヴィヴェイロス＝デ＝カストロらの著作は、ラテンアメリカにおいても広く影響力を持っている。フィリップ・デスコラ（小林徹訳）『自然と文化を越えて』水声社、2020年、エドゥアルド・ヴィヴェイロス＝デ＝カストロ（檜垣立哉、山崎吾郎訳）『食人の形而上学 ポスト構造主義的人类学への道』洛北出版、2015年。
- (55) タラル・アサドのイスラームの人類学や言説的伝統の議論の影響下にあるジョエル・ロビンズやウェッブ・キーンらの研究が広く読まれている。Cannell, Fenella (eds.), *The anthropology of Christianity*, Durham, London, Duke University Press, 2006; Robbins, Joel, *Becoming sinners: Christianity and moral torment in a Papua New Guinea society*, vol. 4, University of California Press, 2004; Keane, Webb, *Christian moderns: Freedom and fetish in the mission encounter*, Berkeley, University of California Press, 2007. ラテンアメリカの事例研究としては例えば以下のものがある。O'Neill, Kevin Lewis, *City of God: Christian Citizenship in Postwar Guatemala*, Berkeley, Los Angeles and London, University of California Press, 2010.
- (56) Isasi-Díaz, Ada María; Mendieta, Eduardo (eds.), *Decolonizing epistemologies: Latina/o theology and philosophy*, Fordham University Press, 2012; Barreto, Raimundo; Sirvent, Roberto (eds.), *Decolonial Christianities: Latinx and Latin American Perspectives*, Springer Nature, 2019.
- (57) Algranti, Joaquín; Mosqueira, Mariela, *op.cit.*